

サロンと仕掛け

— 『失われた時を求めて』におけるサロンの働き —

田 中 良

はじめに

貴族やブルジョワの裕福な女性の邸宅に人々が集まり、談笑したり、踊ったり、音楽や朗読を聞いたりして楽しむ社交場としてのサロンは、17世紀フランスに始まる¹⁾。以来、ルソーのサロン批判²⁾、大革命による中断もありながら、サロンはプルーストの生きた20世紀初頭まで連綿と続いた。そして当然のことながら、サロンの存在は文学にも大きな影響を与えた。とりわけ19世紀フランス文学において、サロンは主人公たちの心を大きく揺さぶり、ときには野心をかき立て、ときには憧れを抱かせた。ジュリアン・ソレルは初めて参加したレス邸での舞踏会に魅了され、『幻滅』のリュシアンはパリ社交界を支配することを決意し、同じようにラスティニャックはパール・ラシェーズの墓地から夜のパリを見下ろしながら「これから一騎打ちだ」と自らに宣言して、ニュシンゲン男爵夫人の晩餐会に向かう。ノルマンディーの農園に育ったエマ（後のボヴァリー夫人）は、初めて行ったダンデルヴィリエ侯爵邸での舞踏会が忘れられない。

『失われた時を求めて』³⁾にも多くの上流社会のサロンがでてきて、そうした社会に属さない者にとってそれらが憧れの対象であることに変わりはないが、その憧れの気持ちを隠しているところがこの小説の特徴である。プルーストはそれをスノビズムと呼び、ルグランダンの場合のようなその体現者、スノップを断罪する。しかしプルースト自身もルグランダンと同じような、上流社会への憧れを抱いていたことは否定できな

い。彼は若い頃からサロンに通い、仲間内ではスノップとまで呼ばれていた⁴⁾。そうした経験が多くのサロン描写として小説の中に生かされていることに間違いはないが、しかしその評判はあまりよくない。多くのページが割かれてる割には、貴族の家系や地名の語源などロマネスクから外れた話題が多く、実際読んでいて退屈になる部分でもある。このことは出版当初から指摘されていて、リュシアン・ドーデは「プルーストの作品における純粋に社交界に関する部分は、遅かれ早かれ、時代遅れになる恐れがある」⁵⁾、と辛辣に批判している。一方ジャン＝イヴ・タディエは、「多くの読者はこの小説の中に晩餐会と夜会の連続しか見えないが、実はそこでは絵画についての臆想や貴族の虚栄の発見といったドラマが展開している」⁶⁾、としてこの小説におけるサロン描写を擁護している。

批判するにしろ擁護するにしろ、一致していえることはサロン描写の長さである。確かにこの小説におけるサロン描写は長い。第3編の『ゲルマントの方』など、サロン描写ばかり読んでいるような気になる。ではその長さとはいったいどれくらいなのか。これまで具体的に調べられた様子がない⁷⁾ので、プレイアッド版(1987-89)全4巻(I-IV)を対象に、それぞれのサロンにどれほどの頁が割かれ、その頁は各編のどれくらいの割合に当たるのかを次章で検証した。対象としたのは主人公が参加した6つのサロンであり、それらは本論において今後対象とするものでもある。

1. 6つのサロン

主人公が参加した本格的なサロンは以下の6つで、それぞれに割かれた頁数とそれらが各編で占める割合は以下の通りである。ローマ数字はプレイアッド版の巻数を指す。

①ヴィルパリジ侯爵夫人邸でのマチネ(Ⅱ. pp.486-581) 96頁。

②ゲルマント公爵夫人邸での晩餐会(Ⅱ. pp.709-836) 128頁。

①②ともに第3編『ゲルマントの方』にあり、合計224頁。編全

体 (576頁) の39%。

③ゲルマント大公夫人邸での夜会 (Ⅲ . pp.36-117) 82頁。

④ラ・ラスプリエール荘でのヴェルデュラン夫人の晩餐会 (Ⅲ . pp.291-365) 75頁。

③④ともに第4編『ソドムとゴモラ』にあり、合計157頁。編全体 (513頁) の31%。

(④の晩餐会は主人公が初めて出席したもので、その後も彼は何度か昼食会や晩餐会に出席してはいるが、そうした断片的なものは省略した。)

⑤ヴェルデュラン夫人邸での夜会 (Ⅲ .pp.732-830) 99頁。

第5編『囚われの女』にあり、編全体 (397頁) の25%。

⑥ゲルマント大公夫人邸でのマチネ (Ⅳ .pp.499-635) 137頁。

第7編『見出された時』にあり、編全体 (351頁) の39%。

『失われた時を求めて』全体の総頁数は、3037頁。そのうち6つのサロンにさかれた頁は合計617頁、全体の約20パーセントに当たる。

本論では言及していないが⁸⁾、第1編『スワン家の方へ』と第2編『花咲く乙女たちの陰に』には以下のようなサロン描写もある。

A. ヴェルデュラン家のサロン (a. I. pp.197-212, b. pp.247-260) 30頁。

B. サン＝トゥーヴェルト侯爵夫人邸での夜会 (I. pp.316-347) 32頁。

ABともに第1編『スワン家の方へ』の中の「スワンの恋」にあり、合計62頁。

Aaはヴェルデュラン家でのスワンのデビューの日、Abはフォルシュヴィルのデビューの日。

C. スワン夫人のサロン (I. pp.536-562) 27頁。

第2編『花咲く乙女たちの陰に』にある。

ABCを合計すると89頁、総計ではサロン描写は706頁となり、全体の約23パーセントに当たる。やはりこの割合は、他の作家と比べるまでもなく、異常に高いといわねばならない。その理由の一つとして、当然ながらサロンに対する作者の深い関心を挙げることができるが、それとは

別にプルーストにはサロンを描くことに対する楽しみもあったはずである。実際彼はこの作品に着手する前に、いくつものサロン評を新聞紙上に発表している⁹⁾。

ところで、上記の9つのサロンを見渡して気づくことは、全7編のうち第6編『逃げ去る女』を除いた全ての編に、量の多寡はあるものの、サロンが万遍なく配置されていることである。サロンが小説構造全体に大きく関わっていることの証明でもある。

本論の目的は、こうした重要なサロンを描くに当たり、作者が周到に準備した仕掛けを検証することにある。どのような仕掛けが、どのような目的で施されているのか。大きくいえば、仕掛けは2つで、1つ目は死と芸術である。実際、この小説ではサロンの前後あるいはその最中に、知人の死が報告されたり、主人公が音楽を聴いたり、絵画を観たりしている。その目的は、サロンの持つ華やかさの裏に隠された、虚飾性、空しさを暴くことにあると考えられる。この点に関しては第2章と第3章で検証されることになる。2つ目はサロンそのものに一種の蝶番のような役目を担わせて、そこに様々な事柄を繋ぎ止めるという仕掛けである。その結果、サロンは孤立することなく、その前後の様々な出会い、出来事、物語としっかりと結びつけられて、語りの連続性を保証している。これは小説技法上の工夫であり、仕掛けでもある。この点に関しては第4章と第5章で検証されることになる。

2. 死

対象とする6つのサロンのうち、②ゲルマント公爵夫人邸での晩餐会を除く他の5つのサロンでは、その前後にサロンの常連、あるいは親族の死に関する情報が伝えられている。つまり死の仕掛けである。その仕掛けによって、それを聞いたサロンの主人たち、あるいはサロンに出かけようとしていた人たちは、その情報を無視するか否定せざるを得ない立場に追い込まれる。なぜなら彼らは、その情報によりサロンが台無しになることを恐れているからである。この仕掛けは、彼らのエゴイズム

と、普段常連間にみられる親密性がいかに表面的で虚飾にあふれたものであるかを暴露している。

①ヴィルパリジ侯爵夫人のマチネ、これは主人公が初めて参加した貴族のサロンである。このマチネから主人公が戻ると、祖母の具合が悪くなっていた。その後祖母は、シャンゼリゼ公園内のトイレで発作を起こし、まもなく亡くなる。これは祖母から孫への、サロン通いには注意しなさいという無言の警告でもある。ところで祖母の死に関するこのエピソードは、最初からこの位置にあったわけではない。手稿にも校正刷りにもこのエピソードはなく¹⁰⁾、最終段階でこの初めてこの位置が選ばれた。つまり主人公が初めて参加した貴族のサロンの後という位置である。ここにははっきりと、サロンと死を対峙させようとする作者の意図が読み取れる。

③ゲルマント大公妃邸で夜会が催される当日の朝、ゲルマント公爵夫妻に2つの死、つまり従兄弟のアマニヤン・ドスモン侯爵とスワンの死が予告される。侯爵が死に瀕していると伝えに来たのは親族の2人の婦人である。しかし公爵夫妻のその夜の予定は詰まっていた。午後8時からのサン＝トゥーヴェルト侯爵夫人邸での晩餐会に出席して、その後大公妃邸に顔を出してから、午前1時からの仮装舞踏会に出るつもりになっていた。公爵夫妻はどうあってもこの予定を変更しなかった。従って、従兄弟の侯爵の病状を問い合わせに行った召使いが戻ってきて、「侯爵様はまもなくご臨終です」(II. 875)と告げたとき、公爵は「おお、生きています」と安堵して、晩餐会に出かける。そして大公夫人邸から一端自宅に戻り、今度は仮装舞踏会に出かけようとしていたとき、再び例の2人の婦人がやってきて、侯爵の死をはっきりと告げる。それでも公爵は、「大げさすぎる」(III. 123)とって相手にしない。

スワンは当日の朝、約束通り公爵邸にやってきた。そのとき彼は自ら自分の死を予告するつもりはなかったが、たまたま公爵夫人から翌春のイタリア旅行を執拗に誘われ、それを断る理由として仕方なく、余命3、4ヶ月の病に罹っていると告白する。馬車に乗り込もうとしていた公爵

夫人は、年来の友人からの思いがけない告白を聞いて、社交界に行きたい欲望と友人への同情の間で一瞬動揺しながらも、公爵にせかされて馬車に乗り込む。一方公爵は、妻が赤いドレスに黒い靴を履いていることに気づき、大声をだして履き替えに戻らせる。作者によって見事に演出された有名なこの場面は、華やかな社交界に死という陰を投げかけている。

④ラ・ラスプリエール荘でのヴェルデュラン夫人の晩餐会。この別荘はヴェルデュラン家がカンブルメール家から借りているものである。この夜会の直前、大学教授ブリショはヴェルデュラン夫人お気に入りのピアニスト、ドゥシャンブルが死んだことを告げるが、ヴェルデュラン氏は知人が死ぬと妻がショックを受けるので、その話はしないようにみんなに口止めする。サロンでは「人は死ぬとすぐ、まるでそれまでも存在しなかったようになる」(III, 288)。

⑤ヴェルデュラン夫人邸での夜会は普段はパリの自宅で開かれている。ここでも直前に、スワンとシェルバトフ夫人という2人の常連の死が告げられる。

スワンの死は、主人公がこの夜会に行く途中、新聞に載ったスワンの死亡記事を思い出すという形で読者に知らされる。きっかけは、その途中同じようにヴェルデュラン家に向かうブリショに出会い、話題がスワンに及んだためである。スワンは主人公にとって、知的で芸術的なすぐれた人物であった。そのスワンも死ぬばすぐに忘れ去られるだろう。「しかし」と話者は続ける。「しかし、親愛なるシャルル・スワン、私は若い頃あなたをほとんど知らず、あなたの方は墓場近くにいた。あなたは私を馬鹿な坊やとみなしていたはずだが、その男があなたを小説の主人公にしたからこそ、再びあなたは人の話題になり、またおそらく生き続けることになるのだろう」(III, 705)。サロンに行く直前にこのようにスワンに呼びかけることにより、スワンは蘇る。サロンは死者を無視するが、芸術家は死者を蘇らせる、という作者からのメッセージであろう。

もう一人のロシアからの亡命貴族、シェルバトフ大夫人の死は、サ

ロンの始まる前に中庭で古文書学者サニエットによって常連たちに伝えられる。それを聞いたヴェルデュラン氏は、「重病であることは知っています」(III. 733)と答えて、その死を認めようとしなない。サニエットが「とんでもない。6時にお亡くなりになりました」と叫んでも氏は、ゲルマント公爵同様、「あなたはいつも大げさだ」といって、あくまでも認めようとしなない。

⑥ゲルマント大公妃邸でのマチネに行く途中、主人公は脳卒中から立ち直った、白髪のシャルリュスに出会う。男爵はジュピアンに付き添われている。「彼(男爵)は早口で、しかも聞き取りにくい声で話すので、私には彼が何をいっているのかわからなかった」(IV. 439)。しかし次の言葉だけは主人公にははっきりと聞きとれた。「アンニバル・ド・ブレオーテ、死んだ。アントワヌ・ド・ムーシー、死んだ。シャルル・スワン、死んだ。アダルベール・ド・モンモランシー、死んだ。ポゾン・ド・タレーラン、死んだ。ソステヌ・ド・ドゥードーヴィル、死んだ」(IV. 441)。このシャルリュスによる死者の名前の列挙は、自らの死に対する予感と恐れを表すとともに、主人公に対しては、これから赴こうとしているサロンの空しさを暗に告げている。セルジュ・ゴベールは、サロンと死について次のように指摘している。「音楽同様、死は暴き真実を告げる。死は社交界の集まりを空しい輪舞、戦争中のばかげた花火として告発する。」¹¹⁾

3. 音楽と絵画

『失われた時を求めて』において音楽が演奏されるのは、ブルジョワのヴェルデュラン夫人のところであって、貴族のゲルマント系のサロンにおいてではない¹²⁾。実際スワンがヴァントウユのソナタを聴くのも、主人公がフォーレの曲、ヴァントウユの七重奏曲を聴くのもヴェルデュラン夫人のサロンにおいてである。最後の⑥ゲルマント大公夫人邸でのマチネでは開宴の前に演奏会が催されてはいるが、それはこの大公夫人が元ヴェルデュラン夫人であるからである。大公は妻の死後、ヴェルデュ

ラン夫人と再婚している。しかし実際には主人公は、大公夫人邸では演奏を聞いていない。このとき主人公はその演奏後にサロンに入っている。元々主人公は「ゲルマント家でのコンサートの全てを聴く気はなかった」(IV. 437)。だから行く前に時間つぶしのためにシャンゼリゼを散歩し、そこでシャルリュスに出会っている。フランソワーズ・ルリシュも指摘するとおり、ゲルマント家は作者によって意図的に音楽から遠ざけられている。

従って主人公が音楽を聴くは、ブルジョワのヴェルデュラン夫人主催の④⑤のサロンにおいてである。ヴェルデュラン夫人は、スワンが常連であった時代から音楽好きで、主人公が出入りするようになってからも、ラ・ラスプリエール荘でもパリの自宅でも音楽を演奏させている。彼女のサロンは「音楽の寺院」(III. 263)であり、彼女は「音楽の荘厳さを演出する神」(III. 753)であった。

④ラ・ラスプリエール荘での夜会では、フォーレの曲が演奏され、次の曲として主人公はフランクの曲を望むが受け入れられず、カンブルメール夫人が希望したドビュシーの「祭り」という曲が演奏され喝采を浴びる(III. 344-345)。しかし実のところ演奏者のモレルは途中で勝手に別の作曲家の曲に変えていて、それには誰も気づかなかった。このサロンには音楽の真の理解者はいるのか、という話者の疑問符であり皮肉でもある。

⑤ヴェルデュラン夫人邸でのパリの夜会では、ヴァントウユの七重奏曲が演奏される。主人公はこの曲を初めて聴いたので、最初「未知の国に来た」(III. 753)ように感じるが、そのうちこれがヴァントウユの未発表作品であることに気づく。彼はこの曲を「天上の楽節」(III. 762)のように聴き、陶醉する。そしてある楽章が終わり休憩に入ったとき、彼は何人かと言葉を交わし、そのことから次のように自問する。「彼らの言葉は何なのか。今まで私が対話していたあの天上の楽節と比べると、それらは人間のあらゆる外面的な言葉と同様、私には全く関係ないものと思えた」(III. 762)。ここでは、音楽がサロンでの会話の空虚性を浮き彫

りにしている。そのため彼は、「音楽こそ魂の交流の唯一のものである」と結論づける。つまりサロンにおける音楽は、主催者が意図したようにサロンの雰囲気盛り上げるのではなく、少なくとも主人公には逆に、サロンの虚飾性、空しさを露呈させている。

ヴェルデュラン家が音楽を愛するとすれば、ゲルマント家は文学と絵画を愛する。ゲルマント家に属するヴィルパリジ侯爵夫人は絵を描き、ゲルマント公爵夫人はユゴーの詩を暗唱し、エルスチールの絵を収集している。このうち仕掛けとして作用しているのは、公爵夫人所有のエルスチールの絵である。主人公は②公爵夫人の晩餐会に招かれたとき、サロンに入る前にエルスチールの絵を見せてもらう。案内された部屋の「壁は彼（エルスチール）の何枚もの絵で覆われていた」（II. 712）。主人公はそれらの絵と向き合うとすぐ、「夕食の時間をすっかり忘れてしまっていた。」そしてそれらの絵を眺めながら、主人公はこの画家の創作方法を次のように推測する。「エルスチールはたったいま感じたものから、知っていたものをはぎ取ろうとする。彼の努力は、私たちがヴィジョンと呼んでいる理屈の寄せ集めを、しばしば解体することであった」（II. 713）。これは知性、理性より感性を重んじるという考え方であり、それは知性、理性の支配するサロンの側からすれば反サロン論でもある。サロンに入る直前に主人公に絵を鑑賞させること、それはサロンが成り立っている理念そのものを揺るがそうとする作者の仕掛けの一つである¹³⁾。

4. サロンの前に

サロンは、様々な事柄を結びつける蝶番のような働きもしていて、これも仕掛けの一つである。この小説ではサロンの前後に、様々な出会い、出来事、物語が語られているが、それらはサロンとなんらかの形で関連づけられ、サロンに繋ぎ止められている。プルーストは様々な出来事が散り散りになるのを避けるために、「はっきりとした中心（foyers）の周りに出来事を集める」¹⁴⁾とタディエは述べているが、まさしくサロンはその中心の一つである。

最初にサロンの前に起こったことから検討してゆくと、それはサロンの当日、その前日、あるいはその2日前という形で表れる。

①ヴィルパリジ侯爵夫人のマチネの当日

ルグランダンとの出会い→サン＝ルーとラシエルの物語

このサロン場合、その当日そこに行くまでのこととして2つの重要なエピソードが語られる。

1つ目はルグランダンとの出会いである。その当日、サン＝ルーが親戚にあたるヴィルパリジ侯爵夫人のサロンに連れて行ってくれるというので、主人公は朝早く家を出てサン＝ルーの所に向かう。そしてその途中、「コンプレ以来会ったことのなかった」ルグランダンに出会う。この田舎紳士は正装している主人公を見て、彼がどこかのサロンに出かけるものと思い、自分はサロンなどに関心はなく、「町はずれで、すみれ色の空にバラ色の月が上がるのを一人眺めてる」(II, 452)と主人公にいう。ところがルグランダンも実は、招待されてもいないのに、主人公と同じヴィルパリジ侯爵夫人のサロンを訪れようとしていた。彼は何度も断られた後、ようやくサロンに入れてもらえるが、不幸なことにそこで主人公と鉢合わせしてしまう。ここにおいてルグランダンのスノビズムが無慈悲に露呈される。ルグランダンとの出会いは、彼のスノビズムを露呈させるための仕掛けである。

2つ目はサン＝ルーとラシエルの物語である。ルグランダンとの出会いの後、主人公はサン＝ルーと落ち合い、パリ郊外に住むサン＝ルーの恋人ラシエルに会いに行く。その後、ラシエルは主人公がかつて会ったことのある娼婦であること、彼女が偶然駅で同業者と出会ってしまうことなど、2人にまつわる様々なことが語られるが、これらの物語は直接ヴィルパリジ夫人のサロンと結びついていない。ましてやサン＝ルーは、主人公をヴィルパリジ侯爵夫人のところに連れてゆくと約束していたにもかかわらず、後から行くと言って途中で主人公と別れてしまう。この2人の物語は、同日ということだからうじてサロンに繋ぎ止められている。サロンは、様々な出会い、出来事、物語を語りの中に繋ぎ止める蝶

番のような役目をしている。

②ゲルマント公爵夫人邸での晩餐会の前日

ステルマリア夫人との夕食の予定とそのキャンセル→サン＝ルーとの夕食

6つのサロンのうち、この晩餐会は最も仕掛けが薄い。

前日のこととして、ステルマリア夫人との夕食がキャンセルされ、その代わりとしてサン＝ルーと夕食をとるエピソードが語られる。それぞれ興味深いものではあるが、それらは前日ということでサロンに繋ぎ止められているだけで、直接的にサロンの仕掛けにはなっていない。この晩餐会は、例外的にそこへ向かう途中の話はなく、突発的に始まる。仕掛けがあったとすれば、サン＝ルーが別れ際に主人公にいった一言、「明日の晩11時頃に叔父シャルリュスの家に立ち寄ること」(II. 705)であろう。この一言によりこのサロンは、主人公とシャルリュスとの唯一の対決の場へと繋がってゆく。

③ゲルマント大公夫人邸での夜会の当日

シャルリュスとジュピアンの出会い→アマニヤン・ドスモン侯爵とスワンの死の予告

この夜会は、最も周到に仕掛けられている。

侯爵とスワンの死の予告については前章で述べたが、ここで問題にしたいのはこの死の予告と、シャルリュスとジュピアンの出会いとの語りの順番である。時間系列でいうと、この当日の朝、主人公は大公夫人からの招待状の真偽を確かめるため、ゲルマント公爵夫人の帰りを待っていたとき、偶然シャルリュスとジュピアンの出会いを目撃し、その後夫妻が戻ってきて、書斎で主人公と会談中に侯爵が重病という知らせが入り、次にスワンが訪問する、という順になる。ところが作者はこの順を逆にして、2人の死の予告を先にして、シャルリュス＝ジュピアンの場面を後回しにしている。その理由として作者は、「その(シャルリュスについての)発見自体がとても重要だったので、それに対して思い通りの位置とスペースを与えることのできる今この瞬間まで、その報告を延期

してきたのである」(III, 3)と断っている。作者がいかにこの場面を重要視していたかがわかると同時に、この位置の変更により、語りのレベルではこのシャルリュスの場面はより夜会に近づくことになった。ということは、この夜会の直前に語られるシャートルロー公爵のエピソードに近づいたということでもある。主人公は大公夫人邸の前でこの公爵に出会い、その折り次のようなエピソードが語られる。それはこの夜会の数日前、大公夫人邸の一人の門衛がシャンゼリゼで一人の青年に出会い、彼と快樂に耽り大金をもらったというもので、そしてその青年がシャートルロー公爵であった(III, 35)。この同性愛にまつわるエピソードは、シャルリュス=ジュピアンのエピソードに直結している。その結果、シャートルロー公爵のエピソードは唐突さを免れている。語りの順番を変えることにより類似したエピソードを接続することもまた、語りレベルでの一つの仕掛けである。

④ラ・ラスプリエール荘でのヴェルデュラン夫人の晩餐会の2日前と当日

2日前シャルリュスとモレルの出会い／バルベックから別荘までの駅
ラ・ラスプリエール荘はバルベック近郊にある。バルベックに2度目の滞在をしていた主人公は、ある日夫人からこの別荘での晩餐会に招待されるが、その2日前、彼はドンシエール駅でシャルリュスとモレルの出会いを目撃していて、これはシャルリュス=ジュピアンの出会いの位置づけと非常に似ている。シャルリュス=ジュピアンの場合はサロンの当日であったのに対し、この場合は2日前ではあるが、どちらもサロンの前に位置づけられている。ここでもサロンが蝶番の働きをしている。

この晩餐会に行くまでに仕掛けられているのは駅である。主人公がこの別荘に行くには、まずバルベックの駅から列車に乗り、いくつかの駅をやりすごし、ドゥーヴィル=フェテルヌ駅で降りる。そこで迎える馬車に乗り、ドゥーヴィルの入市税関を経て別荘に着く。その途中の駅、グランクール=サン=ヴァスト駅では常連の医師コタール、彫刻家スキ一、大学教授ブリショ、古文書学者サニエット、メーヌヴィル駅ではロ

シア貴族のシェルバトフ大公夫人が乗ってきて会話が交わされ、それを機会に常連たちのエピソードが語られる。その列車はすでにサロンになっている。「こうした小さな鉄道の停車駅も結局は、他の場所と同じように、社交場の一つなのである」(III. 495)。

⑤パリのヴェルデュラン家での夜会の当日

モレルとの出会い→プリショとの出会い→シャルリュスとの出会い

この夜会に行く途中、主人公はモレル、プリショ、シャルリュスと出会う。3人とも同じ夜会に向かう途中である。

最初はモレルであるが、その出会いの前に主人公は彼を見かけていた。そのときモレルは、婚約者になるはずのジュピアンを罵っていた(III. 669-670)。夜会に行く途中、今度は道端に蹲って泣いているモレルに主人公は出会う。モレルは愛する人を怒鳴りつけてしまったと泣いている(III. 699)。その変わり様が示すものは、人は人格も容貌も含めて固定したものではなく、数時間のうちにでも変貌しようという作者からのメッセージであり、スワンの容貌が数時間で大きく変貌した(III. 90)ときにも示されたものである。

次に出会うのはプリショである。彼によると、ヴェルデュラン夫人は以前の住居から引っ越して、今はコンティ河岸に豪華な住居を持ちそこでサロンを開いてるという。ここで初めて、これから主人公に向かうヴェルデュラン夫人のサロンはスワンが通っていたところとは別物であることが明らかにされる。

3人目のシャルリュスは、ヴェルデュラン夫人邸の前で主人公に声をかけてくる。男爵はその日の朝モレルから聞いた話として、この夜会にはヴァントゥ嬢とその女友達が来ることになっているという情報を主人公に伝える(III. 728)。実際には彼女たちは来なかったが、サロンに入る直前に主人公にとっては驚くべき情報が伝えられている。

⑥ゲルマント大公夫人邸でのマチネの当日

シャルリュスとの出会い→一連のレミニサンス

療養所で何年も過ごし、久方ぶりにパリに戻った主人公は、招待状が

届いていたゲルマント大公夫人のマチネに出かける。そしてその途中、シャンゼリゼでシャルリュスに出会う。久しぶりに会う男爵は、脳卒中から立ち直ったばかりで、髪の毛と顎髭が銀色に輝き、「リア王」(IV. 438)のような威厳を保ちながらも、貴族的傲慢さは失われていた。さらに信じられないことに、手には祈祷書らしきものを持っている。これが男爵最後の姿であり、作者はそれをサロンの前にうまく位置づけている。

シャルリュスと別れた後、サロンに入るまでに主人公は一連のレミニサンスを体験する。大公夫人邸の中庭を歩いていたとき、敷石の感覚からヴェネチアを無意識的に思い出す。さらに演奏が終わるのを待っていた書齋では、皿にあたったスプーンの音、ナプキンの固さ、水道管の音、偶然手にしたジョルジュ・サンドの小説『フランソワ・ル・シャンピ』などが忘れ去っていた過去を蘇らせる。こうした一連のレミニサンスは、サロンに入る直前に起こっている。そしてそうした体験がもたらす喜びの原因を探ってゆくうちに、主人公は「芸術作品こそ失われた時を見出す唯一の方法である」(IV. 478)という結論に達し、その思考はサロンに入っても続く。「今では私の内部で精神生活が極めて強力に始まったので、たった一人で書齋にいたときと同じように、サロンで招待客の中においても思考を続けることができるような気がした」(IV. 497)。ここにおいて心理的にも、サロンの前とサロンが連結される。

5. サロンの後で

前章で見たとおり、この小説におけるサロンは突発的に始まることはまれで、たいていの場合それに先だって十分な準備、仕掛けが施されている。そしてその終わりもまた、突然終わることなく、次の物語への準備、仕掛けを秘めている。その中心となっているのは、①②ではシャルリュス、③④⑤ではアルベルチヌである。

①ヴィルパリジ侯爵夫人のマチネの後

このマチネの帰り、主人公はシャルリュスから声をかけられる。男爵は主人公の腕を取りながら、ひとしきりゲルマント家の自慢をした後、

社交界に入るための手助けをしてあげようと主人公を誘惑する。男色者シャルリュスの触手が、まだ男爵の真の姿を知らない主人公に徐々に向かい始める。

②ゲルマント公爵夫人邸での晩餐会の後

この晩餐会の後、主人公は前日にサン＝ルーから伝言されたとおり、夜の11時にシャルリュスを訪問する。男爵邸に着くと、主人公は長く待たされた挙げ句、男爵から理不尽な罵詈雑言を浴び、主人公もその理不尽さに激怒して衝動的に椅子におかれた男爵のシルクハットをずたずたに引き裂く。この場面はこの小説には珍しく、感情が激しくぶつかり合うところで、男爵の異常性が表れる重要な場面でもある。しかしここでもまだ、シャルリュスの怒りの原因が同性愛にあるとは主人公に認識されていない。それがはっきりするのは、次のサロンの直前、つまり前述したゲルマント大公夫人邸での夜会の前に、シャルリュス＝ジュピアンの出会いを目撃してからである。いずれにしても、①②のサロンの後をシャルリュスと主人公の物語が引き継いでいる。

③ゲルマント大公夫人邸での夜会の後

この夜会の後、アルベルチーナが主人公のアパルトマンを訪れる。彼女は観劇の後、主人公のアパルトマンに来る約束になっていた。夜会が終わったのは夜の12時15分前、公爵夫妻は自分たちがこれから向かう仮装舞踏会に主人公を誘うが、主人公は若い女性に会う約束があると言って断る。自宅に戻るとまだ彼女は来ていない。あきらめかけた頃、彼女から断りの電話が入る。しかし主人公は無理矢理彼女を自宅に来させる。このようにしてサロンの終わりアルベルチーナの物語がつながってゆく。

④ラ・ラスプリエール荘でのヴェルデュラン夫人の晩餐会の後

最初の晩餐会以降、何度も主人公はこのサロンに行くことになるが、その後の主人公の人生を大きく変えることになる出来事は、この別荘のある晩餐会からの帰り、列車の中で起こっている。列車の中でアルベルチーナは、ヴァントウ嬢も彼女の友達もよく知っていて、数週間後

にはその友達とシェルブールで会って、いっしょにトリエステに旅行に
 であるという。彼女の同性愛を疑っていた主人公は、彼女が「同性愛のプ
 ロ」(III. 500)として評判のその友達と知り合いで、彼女と旅行の計画
 をしているのを知り驚愕する。「アルベルチーナの背後に私は、もはや
 山々のように連なる青い海の波ではなく、彼女がヴァントゥユ嬢にしな
 だれかかっているモンジューヴァンの部屋を見ていた」(III. 501)。その
 結果、主人公は次の駅で降りようとするアルベルチーナを引き留め、パ
 リまでつれてゆくことに決める。そのパリで彼女は「囚われの女」とな
 る。この筋道はサロンからの帰りの列車の中でつけられている。

⑤ヴェルデュラン夫人邸での夜会の後

この夜会にはヴァントゥユ嬢と彼女の友達が来ることをシャルリュス
 から聞いていたので、主人公は行き先をアルベルチーナに告げずに家
 を出ていた。家に戻り、彼女にヴェルデュラン夫人の夜会に行つて来た
 と告げると、彼女は怒りだす。しかし主人公の巧みな質問に誘導されて、
 彼女はそれまで隠していた旅行やつき合いを暴露してしまう。ここにお
 いてヴェルデュラン家の夜会とアルベルチーナの話がしっかりと接続す
 る。このように③④⑤のサロンの後は、アルベルチーナと主人公の物語
 が引き継ぐ。

終わりに

プーレストはこの小説の最後の最後に2つの工夫、仕掛けを施してい
 る。1つ目は、この長編小説を書く決意で終わらせることである。タディ
 エは、小説を死や結婚で終わらせるのではなく、その結末を開いたまま
 にしておくことは20世紀文学の発見であるとし、その先駆として『失わ
 れた時を求めて』を挙げている¹⁵⁾。2つ目は本論のテーマでもあるサロ
 ンに関わる仕掛け、それは最後のサロン、⑥ゲルマント大公夫人邸での
 マチネをお開きにせずに小説を終わらせることである。これまで5回の
 サロンでは、はっきりとお開きになり、その後をシャルリュスとアルベ
 ルチーナが引き継ぐのに対し、この最後のマチネだけは誰に引き継がれ

ることもなく、お開きにもなっていない。マチネの最後のイメージは、椅子に座っていたゲルマント公爵が、立ち上がろうとした瞬間よろける姿である。それは83才という公爵の年のせいだと話者はいい、自分もまた知らないうちに年をとっているはずだから、はたして作品を完成させるのに十分な時間が残されているのだろうかという不安の中で、書く決意をしてこの小説は終わる。確かにサロンの終わりを暗示する表現はある。「まもなく私がシャンゼリゼを通過して帰宅するときに、、、」(IV. 616)という表現によって、このマチネが間もなく終わろうとしていたことは確かである。しかし話者は、これまでのようにマチネが終わって家に戻ったとは述べていない。帰ったところで、待っている人はいない。待っているのは書くという行為そのものであり、「孤独な暮らし」である。「確かに明日から早速、ただし今度はひとつの目的をもって、孤独な暮らしを再開するつもりだった。自分の家でも、仕事中には面会を断るつもりだった」(IV. 563-564)。書く決意によって小説を終わらせるばかりでなく、最後のサロンを開いたままにして小説を終わらせること、この仕掛けにもプルーストによって切り開かれた新しい文学の地平を見ることができる。

(奈良大学教授)

注

- 1) 17世紀フランスでは、社交場としてのサロンは「サロン」salonではなく、「リエール」ruelleと呼ばれていた。ベッドの両脇の空間を指す言葉である(川田靖子著『十七世紀フランスのサロン』、大修館書店、1990、7-8頁参照)。
- 2) 赤木昭三・赤木登美子著『サロンの思想史』(名古屋大学出版、2002)の終章を参照。
- 3) 『失われた時を求めて』からの引用は全て、Marcel Proust ; *A la recherche du temps perdu*, Pléiade, tome I-IV, 1987-1989による。ローマ数字は巻数、アラビア数字はページ数を示す。
- 4) Gautier-Vignal ; *Proust connu et inconnu*, Robert Laffont, 1976, p.216.
- 5) Lucien Daudet ; *Autour de soixante lettres de Marcel Proust (Les Cahiers Marcel Proust 5)*, Gallimard, 1928, p.40.
- 6) Jean-Yves Tadié ; *Proust et le roman*, Gallimard, 1971, p.344.

- 7) 天野由紀代は「スノビズムの構図 ― プルーストの社交界」（『ユリイカ』、青山社、1987年12月臨時増刊号）において、本論と同じ6つのサロンをスノビズムの観点から鋭く分析し、その中で各々のサロンが占める頁（旧ブレイアッド版）を明示してはいるが、その頁数とそれらが各々の編で占める割合を示すまでには到っていない。
- 8) 以下のABC3つのサロンを考察の対象からは除外したのは、ABはまだ十分に仕掛けられていないため、Cは本格的なサロンとは呼べないためである。
- 9) 例えば、〈*Un salon historique. Le salon de S.A.I. la princesse Mathilde*〉（*Le Figaro*, 25 février 1903）、〈*Le salon de la comtesse d'Haussonville*〉（*Le Figaro*, 4 janvier 1904）、等。
- 10) *A la recherche du temps perdu, II*, Pléiade, 1988. p.1666 (note).
- 11) Serge Gaubert ; *Proust ou le roman de la différence*, Presses Universitaires de Lyon, 1980, p.154.
- 12) フランソワーズ・ルリッシュによると、プルーストが実生活において音楽的教養を身につけたのは、ポリニャック大公夫人、グレフェール伯爵夫人、ベアルン伯爵夫人などの貴族のサロンにおいてである。そのため草稿段階では貴族が音楽好きになっていたが、1914年から15年にかけて作者は、自ら恩恵を受けたてきたにもかかわらず、貴族のサロンのもつそうした長所を否定し始める。（Françoise Leriche : *Bouillon de culture*, in *Proust et les moyens de la connaissance*, textes réunis par Annick Bouillaguet, Presses Universitaires de Strasbourg, 2008, pp.183-194.）
- 13) ミシェル・レモンも同様に、主人公が公爵夫人のサロンにはいる前にエルスチールの絵を鑑賞することに着目して、この鑑賞により主人公は社会的価値より芸術的価値の方が勝ることを確認したと結論づけ、さらにこの鑑賞はゲルマント大公夫人邸の図書館での瞑想を思い起こさせるとしている（Michel Raimond ; *Le Signe des Temps*, tome I, CDU et SEDES réunis, 1976, p.76）。
- 14) Jean-Yves Tadié ; *op.cit.*, p.366.
- 15) *Ibid.*, p.407.